

国文学

専攻

領域 (博士前期/修士・博士後期・前後期共通)

試験科目: 第 外国語 (英語) / 専門科目 ()

試験時間: (90) 分

次の文章は Jay Rubin の *Injurious to Public Morals* の一節である。これを読んで以下の問いに答えよ。

Hasegawa Tenkei was one of the most influential propagandists in the naturalistic cause. (1) His column reached a large, literate audience through the magazine *Taiyō* (The Sun), which also contained an English-language supplement, the *Sun Trade Journal* (later, *The Taiyo*), offering political and economic—and some cultural and social—news to foreign businessmen stationed in Japan. The nearly religious fervor that Tenkei brought to his preaching in the Japanese part of the magazine did not deter one “Japonicus” from summarizing the development of naturalism for his foreign audience in the *Sun Trade journal* as follows, under the title “Literature and Zeit-Geist”:

A change, almost to be called a revolution, is taking place in the current thoughts and ideas, in fact in the entire intellectual life of the Japanese. In religion, in literature, in its principles and aspirations, the nation is about to throw away the whole of old cants and grasp new ones {sic}. (2) This is an age of transition and metamorphosis, of revolution and epoch-making, of progress or retrogression, —a crisis or climax in the inner life of the people, in the belief and sentiment of the individuals who constitute the rising nation of the Far East, whose destiny is still an unknown quantity and an enigma to the world in general.

The war with Russia has resulted in a great change in the political status of Japan. She has risen to the position of a power and commands some sort of admiration and dread of other countries. (3) The Western Powers do not now view us in the same light as before the Russo-Japanese War. This change in the external affairs of Japan is so evident to all observers that it hardly needs any further comment.

(4) But as for the internal life of Japan, a change, even more important and more interesting than the political, has been taking place hitherto unnoticed by the West.

The most conspicuous feature of the spiritual transformation of Japan is the rise of the literary school styled *shizenshugi*. This word has been variously translated into English. Literally, it is “natural doctrine”; so it was translated “naturalism.” (5) In essence, however, the doctrine is nothing more or less than Zola’s realism. Writers of this school declare that their aim is to depict the human being as it is: to represent the world in its true light; to trample down all false conventions in search of the truth. With such profession of technical aspiration, the literary market for the last one or two years has been flooded with fiction depicting human nature in its most brutal, realistic, sensual aspect. In short, in the name of naturalism, realism, or what other nomenclature that *shizenshugi* may obtain, extremely fleshly novels, calculated to excite the lower senses of young men and women, were profusely published, and some of these were officially prohibited sale as injurious to public morals. . . .

Shizenshugi has so strongly appealed to the weak points and natural propensities of young people that, if it were untenable as a literary doctrine, it has become a strong factor in the mental life of the Japanese nation. (6) Probed to the bottom, it is nothing but the worship of nudity. Had the worshippers of nudity limited their activities to the sphere of art and literature, the evil would not have been so great. But in Japan, the doctrine was carried a step further and was put into practice by many young people inclined to novel-reading. *Shizenshugi* writers were bad, but the *shizenshugi* practitioners are worse. Combined, they brought about a period of moral degeneration and social retrogression in the history of Japan. . . . It is interesting to note that this tendency is essentially the direct result of the war with Russia. . . .

【注】 Hasegawa Tenkei …長谷川天溪 propagandists …宣伝者 supplement …増刊号 deter …思いとどまらせる Zeit-Geist …時代精神 {sic} …原文のまま (誤りや疑いのある原文を引用した場合の付記) cants …偽善的な決り文句 metamorphosis …変容 retrogression …退歩 enigma …謎 hitherto …従来 trample down …踏みこむ nomenclature …名称 fleshly …肉欲をそそる profusely …多く injurious to public morals …風俗壊乱にあたる propensity …傾向 untenable …支持できない Probed to the bottom …煎じ詰めれば nudity …裸体 degeneration …墮落

- 問1 下線部 (1) を日本語に訳せ。
 問2 下線部 (2) を日本語に訳せ。
 問3 下線部 (3) を日本語に訳せ。
 問4 下線部 (4) を日本語に訳せ。
 問5 下線部 (5) を日本語に訳せ。
 問6 下線部 (6) を日本語に訳せ。

博士前期課程試験問題（国文学）

注意

- 解答用紙は四枚（三枚）あります。※主たる専門分野を国文学とする者は四枚、国語学・漢文学とする者は三枚。
- 解答用紙の右端の欄外にそれぞれ国文学（※一〜二枚）・国語学・漢文学と、よく分かるように大きく書いて下さい。
※主たる専門分野を国文学とする者は二枚、国語学・漢文学とする者は一枚。
- 解答は問題別にそれぞれ解答用紙に書いて下さい。国文学、国語学、漢文学の問題の答えを、それぞれ国文学、国語学、漢文学と欄外に書いてある解答用紙に書いて下さい。
なお、国文学の解答用紙には、右端の欄外に選択した問題の番号を合わせて書き入れて下さい。
- 問題は全部で五枚あります。国文学（二枚）・国語学（一枚）・漢文学（二枚）です。
試験開始の合図があつたら、まず問題が全部そろっているか、確認して下さい。
- 問題用紙も試験終了後、回収しますが、メモ、下書きなどを問題用紙に書くことは差し支えありません。また、選択する問題だけが見やすいように、緩じ目をはずしてばらばらにしても構いません。
- 提出の時は、問題も解答も配布された時と同じく、それぞれ重ねて提出して下さい。問題をばらばらにした場合、元の順序でなくても構いません。

国文学

専攻

領域 (博士前期/修士・博士後期・前後期共通)

試験科目: 第 外国語 () / 専門科目 (国文学)

試験時間: (/ 20) 分

一 次のI群から三項目、II群から二項目を選び、それぞれ三行程度で説明せよ。

- I群 a 高橋虫麻呂 b 『更級日記』 c 『今昔物語集』 d 藤原俊成 e 不易流行
- II群 a 戯作 b 『明星』(第一次) c 『四季』(第二次)

二 次のI・IIのいずれかに答えよ。

I 次の『古今和歌集』の一部を読んで後の問に答えよ。

二葉のまはりにてはるる花のうらみは
 なる時二月三日にまはりにてはるる
 ありくに日ひてはるる雪のうらみに
 なるをよもせぬぞ

文屋下あひて

A 春の日のいろはに
 雪のすぢはるる

此のこころは

B 霞をもちのりも春の雪は
 花かきけとをねらふは

- 問一 全文を、濁点を付しながら翻字せよ。
- 問二 Aの歌の傍線部は、何を比喻しているか、説明せよ。
- 問三 Aの歌の表現と漢詩文との関わりについて説明せよ。
- 問四 Bの傍線部は、どのような風景を表現しているか、説明せよ。
- 問五 Bの歌を現代語訳せよ。

国文学

専攻

領域 (博士前期/修士・博士後期・前後期共通)

試験科目: 第 外国語 () / 専門科目 (国文学)

試験時間: (120) 分

II 次の文章は小林秀雄「再び心理小説について」『改造』昭和六年五月の一部である。これを読んで後の問に答えよ。

問一 傍線部の理論家とはゾラのことである。ゾラと日本近代文学との関連を具体的に説明せよ。

問二 この箇所、小林秀雄が暗に非難している対象として、何を想定できるか。簡潔に説明せよ。

問三 小林秀雄が好んだ文学作品とはどのようなものだったと考えられるか。当時の小林が好意的に取り上げた作家の名をあげつつ、簡潔に説明せよ。

問四 小林秀雄の著作について、知るところを述べよ。

III 国文学を主たる専攻とする者のみ答えよ。

日本文学の中で都市空間がどのように取り扱われ、作品にどのような効果をもたらしているか、具体的に論ぜよ。
(韻文・散文・戯曲のいずれを例としてもよい。また一つの作品を論じても、複数の作品を論じてもよい。)

国文学

専攻

領域 (博士前期/修士・博士後期・前後期共通)

試験科目：第 外国語 () / 専門科目 (国文学)

試験時間： () 分

問題一 次の日本語研究に関連する事項・書名・人名についてそれぞれ説明せよ。

ア 連声

イ 『あゆひ抄』

ウ 破擦音

エ 存在詞

オ 橋本進吉

問題二 次のア、イ、ウのうち、いずれか一つを選び、答えよ。

ア 助詞「が」の歴史について、具体例を挙げながら論ぜよ。

イ 日本語語彙の中で漢語が果たしてきた役割について、歴史的な観点も交えながら具体的に論ぜよ。

ウ 明治時代に成立した近代文体を二つ取り上げ、それぞれの特徴を具体的に論ぜよ。

問題三 「国語学を主たる専門分野とする受験生のみ答えよ」

国語史研究において、外国人による日本語研究がどのような価値を持つか、具体例を挙げながら論ぜよ。

国文学 専攻

領域 (博士前期/修士・博士後期・前後期共通)

試験科目：第 外国語 () / 専門科目 (漢文学)

試験時間： (120) 分

(一) 本文すべて(注疏以外)を書き下し文にし、かつ口語訳せよ。なお、書き下し文は必ずしも本文に付された訓点に従わなくともよい。

(二) 哀駘佗が本文のようであり得るのは何故か、説明せよ。

(三) ①この注と疏は、それぞれ誰によるものか、答えよ。②また、日本で中世から近世前期にかけて盛行した『莊子』注釈の書名と著者名を答えよ。

漢文学を専攻とする者のみ解答せよ。

問題 二 漢文学研究における古注釈の重要性について、一、二の具体例を挙げて論述せよ。

試験科目: 第 / 外国語 (日本語) / 専門科目 ()

試験時間: (90) 分

問題 以下は、阪倉篤義『文章と表現』から抜粋した文章である。よく読んで、以下の問に答えよ (なお、問一は解管用紙、問二は原稿用紙を用いること)。

情緒を明確に指示言語によつて表現することを惜しむ、この日本語の傾向は、結局は、その種の言語によつては大切な情感のひだがつうてい十分には表出し得まい、という恐れ、したがつてまた、これによつて自分がいま微妙に感じとつていものを相手の確に理解してくれることは困難であろう、とする配慮から、来ていると思われる。

この、相手に対する配慮、あるいは「思いやり」を、やや余計なまでにはたらかせるのもまた、日本人の心情の特色としなければならない。太宰治が河盛好藏氏に、次のような手紙を書きおくつてい(昭和二十二年四月二十八日、『太宰治全集』巻十一所収)。

私は優といふ字を考へます。これは優れるといふ字で、優良可なていふし、優勝なていふけど、でも、もう一つ読み方があるでせう? 優しいとも、読みます。さうして、

この字をよく見ると、人偏に憂ふると書いてゐます。人を憂へる、憂ひとの淋しさ、佐しさ、つらさに敏感な事、これが優しさであり、また人間として一番優れていることぢやないかしら。さうして、そんな、やさしい人の表情は、いつでも含差であります。

「優」を「人偏に憂ふる」というのは勝手な解釈であるが(優は「わざわざ」、ひいては「みやびやか」の意で、憂は音符)、これは、いかにも、過剰な自意識と繊細すぎるの経とを遺化の仮面につつんで、てれくささをまぎらわしつづけた太宰らしいことばであるう。「やさしい」という語は、もと、動詞「瘦す」から、「悔ゆ」「くやし」「厭ふ」とは「悩む」なやまし」などと同様の方式で派生した形容詞「瘦さし」であつて、人まへに出て身のほそるような、はずかしい思いをするさまをいつた。『万葉集』の、例の山上

徳良の論竊問答歌に、
世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば(八九三)
というように用いられているのが、それである。そこには、自省の気持と、他人の思わくに対する気がね・配慮とがあるが、そういう「思いやり」に富んだ、おしつけがましくな、い、しおらしい心情や、それをあらわす態度、容姿が、すぐれた、うつくしいものと評価されてきたのである。

太宰の手紙には、右に引用した部分にさきだつて、「文化と書いて、それに、文化といふルビを振る事、大賛成」という一文がある。たしかに、すくなくとも日本文化は、ハニカムという心的態度を、その根底に持つものとして理解しやすい面が多い。

ハニカムというのは、たとえば『日本霊異記』巻上「狐を妻と為て子を生ましむる縁第二」に、犬の浮が、家室(美は狐)にむかつて、
期剋ひ、唾み、誓み、囁吹ゆ。

とあるように、もと、歯をむきだして、相手を威嚇するような態度をとることであつた。にツと歯を見せて、あいまいなほほえみをうかべる、いわゆるハニカムの表情は、きわめて女性的な、やさしさのあらわれのごとくに見えるけれども、これは、実は自己の内部へ相手が立入ることを拒否する、自己防衛の姿勢なのである。いわゆる愛想笑い、外国人の言う不可解な笑いというのは、(これまた相手に対する思いやりから)一往、表面的に好意をあらわしはするが、むしろ、それでカムフラージュして、自分の内心までは相手にのぞかせまいとする姿勢を示すものであり、それはまた同時に、たとえ自分の内心をのぞかせてみても、相手にはとうてい本当のことはわかりはしまいという、あきらめの表情なのである。ながら日本文化をそだてる風土となつてきた京都の住人の、ことに女性の、はださわりのやわらかさと、その裏側のしんの強さとが、これを代表的に示しているように思われる。

日本語に関してしばしば説かれる、かの「敬語」というのもまた、こゝして、気のおける相手ないしは相手の側のものとのあいだに、適当な間隔を保つておこうとする言語手段であつた。敬語は、つまりは「敬遠語」であると言えらるだろう。はれのことはとしての性格のつよい敬語を用いてのコミュニケーションでは、感情の、ありのままの表出は、抑制されざるを得ないのである。

世間のきびしい目を意識し——中世以後には、それが「義理」(本来は、ただしい節道

を意味し、さらに、他人に対してふみ行ふべき道を意味するようになった。『日葡辞書』(を見よ)の感覚とむすびつくにいたる——、自己のいつわりのない心情の理解を他に求めることの困難さを悟ったとき、感情は複雑にダイコウする。もはや言語に表しようもない気持なのであるが、その気持を取ってそのままに表現した語に、たとえば、「わりなし」という形容詞がある。

「わりなし」の「わり」は、「ことわり」の「わり」であつて、要するに道理や理性を越えた状態をいう。もはや義理も社会的常識もかまつてはいられない、「どうしていいかわからない」、あるいは、「どうしようもない」という、切迫した気持を表すのである。「腹を病みていとわりなければ」というように肉体的苦痛についても用いるが、多くは、不安・当惑・懷疑など精神的な痛みについて用いられて、『源氏物語』だけでも百ほどの用例がある。人が、もつともしほしほ、こういう気持をあげわうのは、やはり恋愛の場合であつて、たとえば光源氏の藤壺に対する恋を、紫式部は、「わりなき心のやみ」と表現する。父帝の後である藤壺に対して愛情をよせるなどということは、まさに道にはずれた行為である。そういう非難の心持と同時に、また、理性的にはいけないことと解つていながら、しかも、自分でもどうにもならない、やむにやまれない、という意味を、作者は、この「わりなき心」という語に、込めているようである。「わりなき思い」という語は、一般に、切ない恋愛の感情を言い、「わりなき仲」は恋仲を意味するようになっていった。

世間の常識からすれば、どういふ肯定されそうもない、したがつて、そうすることに人々の理解や共感が簡単に得られるとは思えない、しかし、自分の内部において、そのようにふるまわざるを得ない、どうしようもない、つよい衝動がある。しかも、これを公然と外部にあらわすことには、ためらいがあつて、結局は、ひそやかなあきらめのうちに、みずからの納得できるしかたで、わが生をつらぬいていこうとする、こういう生きかたに、われわれは、強いじらしさを感じる。「意地らしさ」すなわちその意地をひそかに通そうとするすがたのやさしさに、感動するのである。芭蕉は『奥の細道』に、

(六月)八日・月山にのぼる……岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ、なかほひらけるあり。ふりつむ雪の下にうつもれて、春を忘れぬ遅さくらの花の心わりなし。

と述べている。見る人もない山奥でありながら、雪にうずもれる苦難の月日に耐えて、春ともなれば花を咲かせねばならないと、季節はずれにかかわらず必死につとめている、その三尺ばかりの桜のイチャスなすがたを、「わりなし」と言つて、いとおしんでいるのである。芭蕉にはまた、

やせながらわりなき菊のつぼみかな (羅虚栗)

という句がある。かほそいやせ菊が、そのおもみに耐えかねるような、大きなつぼみを懸命にささえて、立つている。こほみきれぬ義務感のようなものが、この苦しさに耐えさせているのであろう。それは、たとえば、夫に逝れた、ひよわな女性が、子どもをかかえて生活に苦闘しているすがたを思わせる。ひとから強制されたものではなくて、いわば彼女自身のわりなき気持が、そうさせているのである。だれに語つても、その本当の心持が正確に解つてもらえるものではない、という、あきらめが、ここには、ある。

「いじらしい」ということばは、本来、自分の意地をつらぬこうとする、拒否的な、自閉した姿勢を意味したはずである。しかも、そういう姿勢をとらざるをえない人間のこのころを思いやつて、人々は、これに同情し、感動する。「いじらしい」という語は、当の本人の性状をいうよりは、むしろ、それに相対する人の心に生じる、いたわりや、いとおしみの感情を意味する語になつてしまつた。一番の問題は、実は、ここにあるのではないか。すなわち、日本人がその感情の表現において極度にことばを惜しみ、あるいは概念化のレベルのひくい、あいまいな表現をとるのは、表現者自身の側にも、そうしておいても——あるいはむしろ、そうすることによつて、相手は十分に自分の心情を氣分的に察してくれなかろうかという安心、ないしは「思いやり」のこまやかさに対する期待が、あるのではうな、いわば情緒共体的な構造を、われわれの社会は持っている。それにはやはり、歴史的な事情もあつて、われわれの社会が、その気質において、きわめて等質的であり、外

に対して閉鎖的であろうとするところに、由来するかとおもわれるのである。

*注 旧本靈異記：仏教説話集。弘仁年間（八一〇～八二四）頃成立。家室：妻。
朝刺ひ：怒つて、攻め寄せる。日葡辞書：イエズス会宣教師が編纂した日本語。
ポルトガル語辞典。本篇は慶長八年（一六〇三）に成立した。

問一 以下のⅠ～Ⅴに答えよ。

Ⅰ 傍線部 1 はどのような意味か、説明せよ。

Ⅱ 傍線部 2 のように筆者が「ハニカミ」の表情を捉えるのはなぜか。その理由を説明せよ。

Ⅲ 傍線部 3 のように筆者が述べるのはなぜか。その理由を説明せよ。

Ⅳ 傍線部 4 について、傍線部のような「いじらしい」の本来の意味が、どのように

転じていったと筆者は考えているか。具体的に説明せよ。

Ⅴ 波線部 ア・イについて、ア・イの漢字の読みを平仮名で、ウ・エの片仮名を漢字で書け。

問二 文章中に示された筆者の日本文化に対する考え方を要約するとともに、それに対するあなたの考えを（母語との比較を含めてもよい）、六〇〇字以上八〇〇字以内で、原稿用紙にまとめよ。

博士後期課程試験問題（国文学）

注意

- 問題は全部で五枚あります。古典国文学・近代国文学・国語学・漢文学の四科目です。試験開始の合図があったら、まず問題が全部そろっているか確認の上、三科目を選び解答しなさい。
- 解答用紙は三枚あります。
- 解答用紙の右端欄外にそれぞれ古典国文学・近代国文学・国語学・漢文学と、よく分かるように大きく書いて下さい。
- 解答は問題別にそれぞれ解答用紙に書いて下さい。古典国文学・近代国文学・国語学・漢文学の問題の答えを、それぞれ古典国文学・近代国文学・国語学・漢文学と欄外に書いてある解答用紙に書いて下さい。
- 問題用紙も試験終了後、回収しますが、メモ、下書きなどを問題用紙に書くことは差し支えありません。また、選択する問題だけが見やすいように、綴じ目をはずしてばらばらにしても構いません。
- 提出の時は、問題も解答も配布された時と同じく、それぞれ重ねて提出して下さい。問題をばらばらにした場合、元の順序でなくても構いません。

国文学

専攻

領域 (博士前期/修士 博士後期) 前後期共通)

試験科目：第 外国語 () / 専門科目 (近代国文学)

試験時間： (120) 分

□ 次の文章は佐藤春夫「秋風一夕話」『退屈読本』新潮社、大正十五年十一月の一部である。これを読んで後の問いに答えよ。

谷崎潤一郎は曾て志賀氏の小説を評して、それに推服しつつも「1かういふ行方をして居れば遂に小説は書けなくなる」といつたのを覚えてゐる。2谷崎といふ人は所謂本格小説家で、且つ小説らしい面白さを捨てない人だから、その点志賀氏のやうな行方を窮屈だと思つたに違ひない。

問一 傍線部1について、事実どうであつたか、具体的に説明せよ。

問二 傍線部2について、文学史上のトピックと関連させるかたちで、具体的に説明せよ。

□ 「近代国文学を専攻する者のみ答えよ」

私小説をめぐる議論について、具体的に説明せよ。

国文学

専攻

領域 (博士前期/修士 博士後期 前後期共通)

試験科目: 第 外国語 () / 専門科目 (国文学)

試験時間: (120) 分

問題一 以下のア・イのうち、いずれか一つを選び、答えよ。

ア 江戸時代または明治時代における文語文の特徴について、文法史および文章史の観点から具体的に論ぜよ。

イ 外国語との接触が日本語の語彙に与えた影響について、国語学的な観点から論ぜよ。

問題二 「国語学を主たる専門分野とする受験生のみ答えよ」

江戸時代の国語研究に関わる著述の中から一つを選び、その内容を紹介するとともに、国語学史的な意義について具体的に論ぜよ。

国文学 専攻 領域 (博士前期/修士・博士後期・前後期共通)

試験科目：第 外国語 () / 専門科目 (漢文学)

試験時間：(120) 分

問題 〇 次に掲げるのは宋陳與義撰、宋劉辰翁評『須溪先生評点簡齋詩集』の江戸
前期刊本である。これを読み、後の問いに答えよ。

觀雨

山客龍鍾不解耕，開軒危坐看陰晴。
前江後嶺通雲氣，萬壑千林送雨聲。
海壓竹枝低復舉，風吹山角晦還明。
不嫌屋漏無乾處，細得正要奉龍洗甲兵。

增註 細素雜記古語有二聲合為一者如不可為
回向不為蓋從西域二合之音切字之原也龍鍾

簡齋十一

乾	樂	吹	杜	羸	潦
處	天	海	子	癯	倒
又	木	立	美	疾	正
安	詩	此	太	即	如
得	雪	云	清	以	二
壯	壓	海	官	龍	合
士	低	壓	賦	鍾	之
挽	還	竹	四	潦	音
大	舉	枝	海	倒	龍
河	○	正	之	目	鍾
淨	社	用	水	之	切
洗	詩	其	皆	者	癯
甲	床	字	立	亦	字
兵	屋	以	坡	此	潦
長	漏	為	詩	義	倒
不	無	音	天	也	切
用		耳	外	○	老
		○	黑	增	字
		白	風	註	老

〔注〕
双行注二行目一字目の「回」は「匡」の誤刻。

国文学

専攻

領域 (博士前期/修士 - 博士後期 - 前後期共通)

試験科目: 第 外国語 () / 専門科目 (漢文学)

試験時間: (120) 分

(一) 詩をすべて書き下し文にし、かつ口語訳せよ。なお、書き下し文は必ずしも本文に付された訓点に従わなくともよい。

(二) 「龍鍾」について、注はどのようになっているか、述べよ。

(三) 「海歴竹枝」について、注はどのようになっているか、述べよ。

漢文学を専攻とする者のみ解答せよ。

問題 二 日本近世の漢詩における宋詩の受容・影響について、一、二の具体例を挙げて論述せよ。